の中肋一面にパピラがあるが，枝葉の中肋では先端部にのみ数個のパピラがあること，花葉には長い cilia があることである。蒴は若くて蒴歯と胞子は確認できなかった。

□日浦　勇：**蝶のきた道** B6版．230頁．1978年9月20日発行，蒼樹書房，1800円。表題からもわかるように，ギフチョウの生活，それをとうしての種の分化，ギフチョウ属の進化を目的に書かれた本である。ギフチョウの食草がカンアオイ類であることから，当然カンサオイにも話が及ぶわけであるが，この本の内容の3分の2近くが，カンアオイに費やされているので，表題とは違って植物の本ともいえる内容である。カンアオイ類の分類は当然前川文夫博士の分類系を基礎としているが，関西に見られるヒメカンアオイ，ミヤコアオイを中心として，その生育環境，受粉の仕方，種子の散布，茎の伸長の仕方などその生活誌を克明に調べ，ヒメカンアオイが他と異る生長方法をとり，それがヒメカンアオイの広分布と関係するらしいことを明らかにしている。ここに述べられていることの一部はカンアオイ類専門の研究者にはすでにわかっている事も含まれているかも知れないが，具体的な事象の上での論理には説得力があり，専門外の者にも興味深く理解される。研究は未完成であり，推測の域を出ない所も多いのは著者も断っているとうりだが，研究方法の筋はとおっている。ただ今後の研究となると多くの困難な問題を含んでいるのでこれからどう発展されるか期待される所である。

　この本で重視されるのは，種の生活内容を克明に観察し，その中から研究方法を見出していこうとする態度である。これは自然研究の基礎である。集団の精密な測定を統計学を借りて解析することや，高度な器具を使って実験するのも一つの方法である。然しその研究の根底には，それぞれの種のもつ生活の内容を把握する努力がなくてはならないと考える。それを欠いているために，折角の努力にもかかわらず，研究結果の解析が底の浅いものに終っているものを見うけることがある。例えばササ類の耐寒性に関して（種生物学研究1号），多大な努力により興味ある実験結果を出しながら，そのまとめはものたりないものに終っているなど惜しいことだと思う。植物の場合，種のもつ形質の中には，かならずしも直接生活にむすびつかず，自己運動としか考えられないものも多い。したがってこの本に述べられているような方法が，すべてに通用するわけではないが，自然誌研究の基本的な態度として一読の価値がある。

（山崎　敬）

正　誤 (Errata)

頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
Vol. 53：313	17	**chiensis**	**chinensis**